



# 穢された競泳水着

北都凜

挿絵／ジェントル佐々木

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	穢されていく競泳水着	4
第二章	水中デーパースロート	53
第三章	堕ちていく水泳部顧問	99
第四章	スクール水着での対面	147
第五章	ビキニで慰め合う二人	198
第六章	競泳水着は奴隷の衣装	248



---

## 登場人物

Characters

---

### 水城 美波

(みずき みなみ)

引き締まった肉体にお椀形のバストを持つ、黒髪ショートカットの十七歳。亡き兄の夢をかなえるため競泳のトップ選手を目指す。勝気だが面倒見がよく、人望も厚い。

### 早乙女 汐理

(さおとめ しおり)

おっとりした優しいな雰囲気の水泳部顧問。釣り鐘形のバスト、むっちりとした脂の乗ったグラマーボディの二十六歳。

### 桑原 恭次

(くわばら きょうじ)

美波の兄の一学年先輩だった、水泳部の臨時コーチ。オリンピック候補選手だったが怪我のため断念した過去を持つ。

---



「え？ ちょっと、これ……」

ようやく裸を隠せたと思ったのも束の間、競泳水着に施された細工に気がついて眉を顰める。胸の裏側についていたパッドが剥ぎ取られているのだ。

乳房の丸みがあからさまになっており、先端の乳首も浮きあがっている。ある意味裸よりも卑猥な格好だった。

「大切な水着を、よくも……」

バイブの異物感に苦しみながら、男の顔を凝視する。どこまで辱めれば気が済むのか、怒りのあまり拳を握り締めていた。

「似合ってるじゃないか。今日はその格好で過ごすんだぞ」

桑原は好色そうに片頬を歪めると、競泳水着に包まれた女体をねつとりと眺めまわしてくる。その目はまだまだ満足しているようには見えなかった。

（この人……なにを考えてるの？）

美波は思わず自分の身体を抱きしめると、寒気を覚えて肩を竦めた。長い一日になるのは間違いなさそうだった。

プールに到着したときには、すでに練習がはじまっていた。

今日も雲ひとつない晴天に恵まれており、部員たちの明るい声が響いている。しかし、美波ひとりだけは暗く沈んだ表情をしていた。

桑原は先に合宿所を出ていった。だが、美波は一步進むたびに腔内をバイブで擦られて、ゆっくり歩くことしかできなかった。通常の倍以上の時間を費やし、ようやくプールに辿り着いた。

練習はじめに全員で行うストレッチは終わっており、部員たちはそれぞれの種目の泳ぎこみを行っている。遅れて登場したキャプテンに気づいて、何人かが視線を送ってきた。

声をかけられないよう、顔をあげずに歩を進める。腔壁をおぞましい淫具に摩擦される刺激で、額に玉のような脂汗が浮かんでいた。

(やだ、見られちゃう……)

心のなかに焦りが生じている。もう強がっている余裕はなくなっていた。

試合に出られなくなるのはもちろんだが、なにより女として恥ずかしい秘密を知られるのが怖かった。

合宿所から歩いてくる間に、この危機を乗りきる作戦を考えていた。

美波は準備体操なしで急いでプールに入った。とはいっても、いつものようにスタ

ト台から華麗に飛びこんだわけではない。プールサイドの梯子を使って、そろそろと水のなかに身体を浸した。

恥ずかしい秘密を隠すには、水中にいるしかない。臆にバイブを挿入し、競泳水着の胸パッドを外されているのだ。絶対に知られるわけにはいかなかった。

自分の胸もとをそっと見おろしてみる。水に濡れたことで、パッドを塗り取られた水着に乳首がくつきりと浮きあがっていた。

(ああ、やっぱり見えちゃってる)

予想していたことだが、あまりにも恥ずかしかった。

しかし、濡れないようにプールサイドにいたとしても、生々しい胸の丸みと透けた乳首を発見される可能性がある。しかも股間にはバイブが刺さっており、柄の部分が不自然に膨らんでいるのだ。

今日一日この格好で過ごすことを考えると、水中のほうがまだリスクが少ないような気がした。

元凶である特別コーチの姿はプールサイドにあった。

濃紺の競泳パンツを穿いた桑原は、偉そうに腰に両手を当てて立っている。部員たちの練習をチェックしている振りをしながら、ときおり美波にいやらしい視線を送っ

てくるのだ。

（楽しんでるんだわ……）

目が合った瞬間、無意識のうちに水中で内腿を擦り合わせた。すると膣内に埋めこまれたバイブを締めつけることになり、強烈な異物感が突き抜ける。シリコン製のカ리가膣壁に食いこみ、耐え難い痛みがひろがった。

「くうっ……」

プールの隅に立ちつくし、小さな呻き声を漏らしてしまう。部員たちに怪しまれると思いつつも、身動きすることができなかった。

「今日は無理をしないでね」

そのとき、頭上から声をかけられてドキリとする。驚いて見あげると、プールサイドに汐理が立っていた。

胸もとに浮いた乳首を隠そうと、慌てて腕組みをして覆い隠す。乳房がへしゃげてしまうが、乳首に気づかれるよりはましだった。

汐理は臙脂色の競泳水着に白いパーカーを羽織り、垂れかかる髪を右手で押さえながら腰を屈めている。先ほど合宿所で声をかけられたときよりも、さらに心配そうな表情になっていた。

「美波ちゃんが遅刻するなんて珍しいから、みんなが驚いてるわよ」  
汝理の言葉を受けて、恐るおそる周囲を見まわしていく。すると、ほとんどの部員たちが練習を中断して不思議そうな目で見つめていた。

（そんな、どうしたらいいの？）

顔色が蒼白になり、頬が引きつっていくのがわかった。

最初にひと言かければよかったのだが、身体を隠すことを優先した。急いでプールに入ったのだが、その行動が裏目に出たのかもしれない。

「ち、遅刻してごめんなさい。みんな、自分の練習に戻って……」

懸命に平静を装って声を絞りだした。とにかく、できるだけ普段どおりに振る舞うしかなかった。

「合宿が終わったら大会よ。さあ、練習に集中して」

作り笑顔でみんなに告げるが、自分の言葉が白々しく感じられた。

一番集中しなければならぬのは美波自身だ。仲間を騙しているような気持ちになり落ちこんでしまう。だが、それを表情に出すこともできなかった。

「美波ちゃん、本当に……」

「ご心配おかけしました。もう大丈夫です」

美波は気丈に笑みを浮かべると、心配顔の汐理に宣言した。

誤魔化すためには、とにかく泳ぐしかない。腔に挿入されたバイブの刺激がつかずぎるが、部員たちの視線を一刻も早く分散させたかった。

（お願いだから見ないで……）

美波は心のなかで祈りながら、中央のコースに移動する。プールサイドの汐理や見学している部員たちの目から、少しでも距離を置きたかった。

小さく息を吸いこみ、壁をそっと蹴る。水中で身体をすつと伸ばし、音もなく静かに進んでいく。しかし、たったそれだけで敏感な腔粘膜が擦られて、鋭い痛みが湧き起こる。さらにバタ足をはじめめることで刺激が大きく膨らんだ。

「んっ……」

小さく呻いて顔を顰めるが、水中なので誰にも怪しまれることはない。傍目からはゆっくり泳いでいるようにしか見えないはずだ。

バタ足をするだけで、どうしても股間が動いてしまう。動きを最小限に抑えて、手で掻く力をメインに泳ぎつつける。

体調が悪いときやフォームの確認をするときなど、全力で泳がない練習も珍しいことではない。タイムを計測するわけではないので、部員たちも興味を失うだろう。の

んびり流していると認識されれば、注目度はさがると踏んでいた。

(でも、擦れちゃう……：バイブが、なかで……：くううっ)

決してスピードをあげることなく、静かにバタ足をする。シリコン製の人工男根がグリッグリツと膣壁を擦るが、奥歯を食い縛って耐えていた。

どんなに抑えようとしても膣は動いてしまう。それでもマイペースの泳ぎで、刺激をできる限り小さくしていた。胸のパッドを外されているので乳房の揺れも激しくなり、かなり泳ぎづらかった。

(今日一日、なんとかがんばらないと……)

自分に言い聞かせて、懸命に水を掻きつづけた。

美波ほどのレベルになれば、バタ足を抑えて手でフォローしても、ある程度のスピードを保つことができる。だが、もちろん記録を狙うような泳ぎはできないし、バランスが悪いので疲労の度合も違っていた。

単に見学者の目を誤魔化すための泳ぎだった。試合でエントリーするのは百メートルの自由形がメインだが、スタミナにもそれなりに自信がある。このスピードで流すだけなら、何時間でも泳いでいられるはずだった。

美波の思惑どおり、部員たちは瞬く間に興味を失ってくれた。

しかし、バタ足を完全にとめるわけにはいかず、腔内を摩擦される痛みは延々と持続している。若干感覚が麻痺してきたのか、鋭い激痛ではなくジーンと痺れるような鈍痛に変わりつつあった。

(ううっ、苦しい……お昼休みはまだなの?)

時間が早く経ってくれることを祈るしかない。本来のリズムとフォームが崩れているので、すでに疲労が蓄積している。このペースだと思っただけよりも早く限界が訪れそうだった。

もう少しスピードを落としたほうがいいかもしれない。

息継ぎをするときに周囲を確認すると、プールサイドに立つ特別コーチのにやつく顔が目についた。

「みんな、キャプテンに負けないようにガンガン泳げよ！」

桑原が大きな声で部員たちに活を入れる。そうやって、わざと美波に注目が集まるようにしているのだ。

(本当に最低だわ……絶対に負けないから)

心のなかで自分を叱咤する。昼の休憩時間になれば、部員たちはいったんプールから出ていくはずだ。それまでは休まず泳ぎつづけるつもりだった。

しかし、桑原は次なる責めを用意していた。どうやら、いつときも美波を休ませるつもりはないらしい。

「おい。おまえは平泳ぎが専門だったな」

プールサイドを歩いている一年生の男子部員を呼びとめる。わざと大声を出しているのか、泳いでいる美波の耳にもはつきりと聞こえてきた。

「美波の後ろを泳いでみる。おまえのタイムだと引き離されないようにするのでやっ  
とだろうが、必死に食らいつくことが力になるんだ」

もつともらしく言っているが、今までそんな練習をしたことはなかった。

桑原にうながされた男子部員が、おどおどしながら「はい」と返事をする。いつも美波のことを眩しそうに見ている童顔の一年生だった。

(わたしの後ろを、平泳ぎで……)

卑劣なコーチの企みがわかり、総身に戦慄が走り抜ける。しかし、泳ぐのをやめるわけにはいかない。プールからあがれば、競泳水着に浮いた乳房をみんなに見られてしまう。股間のバイブにも気づかれてしまう可能性があった。

「キャプテンを追い抜くつもりで泳ぐんだ」

「は、はいっ、行きます！」

先ほどの一年生男子部員がスタート台に立っている。美波がターンをすると、背後で飛びこんだのがわかった。

（ああ、来るわ……どうしたらいいの？）

相手は一年生で平泳ぎだ。普通の状態なら、あつという間に引き離すことができるだろう。だが、今は条件が悪すぎた。キックを強くすると、陸壁が強烈に擦られてしまう。とてもではないがスピードをあげることなどできなかった。

「キャプテンについていけ。前を見てしっかり追うんだぞ」

桑原の煽りたてる声が聞こえてくる。

一年生部員の息遣いが、すぐ背後に迫っていた。平泳ぎなので、息継ぎのたびに前方をしっかりと見据えるはずだ。足もとから見あげられていると思うと、不安でならなかった。

（ま、まさか……見えないわよね？）

美波はバタ足なので股間を覗かれることはないと思う。飛沫もあるのではっきりとは見えないだろう。でも、万が一バイブに気づかれたらと思うと恐ろしい。

「くっ……」

奥歯を強く食い縛り、キックに力をこめていく。一気にスピードをあげて、男子部

員を引き離しにかかる。バイブが食いこんで陸壁に鈍い痛みがひろがるが、今は構っていられなかった。

苦しいながらも距離が開きはじめてほっとしたとき、桑原が大きな声で指示を出すのが聞こえてきた。

「美波、少しスピードを落としてやれ。後輩の練習に付き合うのもキャプテンの仕事だぞ。おまえも平泳ぎをしろ。そうすればちょうどいいだろう」

平然と言つてのけるが、おそらく最初から考えていたことに違いない。息継ぎをするときにチラリと見えた顔には、いやらしい笑みが浮かんでいた。

(この状態で平泳ぎなんて……どこまで辱めれば……)

クロールのバタ足ならまだしも、平泳ぎのキックを真後ろから見つめられるのは危険だった。追ってくる一年生部員は、前だけを見つめているだろう。不自然に膨らんだ競泳水着の股間に気づくかもしれない。

美波は泣きたい気持ちになりながら、クロールから平泳ぎに移行した。今は桑原の命令に従うしかなかった。

せめて追いつかれないように距離を保つしかない。懸命に泳ぐが、平泳ぎは専門外のようにバイブの刺激が邪魔をして十分なキックができなかった。スピードがあら

ず、後輩の男子部員がどんどん追いあげてくる。

（ああ、見られちゃう……どうしたらいいの？）

そんな焦りが、ますますフォームを崩していく。股間を隠したいという思いからキックが小さくなり、十分な推進力を得ることができなくなる。懸命に手で水を掻くが、後輩との距離は急速に狭まっていた。

（お兄ちゃん、わたしに力を貸して）

亡き兄の顔を思い浮かべて踏ん張ろうとしたそのとき、股間から激烈な刺激が全身にひろがった。

「うぐうつ……」

全身がビクンッと震えて危うく溺れかける。それは、これまで感じたことのない暴力的な感覚だった。

腔に埋めこまれているパイプがいきなり震えはじめたのだ。口から空気が溢れて大量の水を飲んでしまった。

（な、なに？ どうして動くの……ああっ、いやあっ）

必死に手足を動かして平泳ぎを継続するが、気持ちは完全に動揺している。テンポを狂わされて、ばたばたした泳ぎになってしまう。スピードをあげるどころか、逆に

スローになっているような気がした。

膾に埋めこまれているバイブが、なぜかブブッと小刻みに振動している。散々摩擦されていた膾壁を、今度は痺れるような妖しい刺激が襲っていた。

「ううっ……ふはっ……ハア、ハア、ハア」

息苦しさのあまり水面に顔をあげる。もう息継ぎをしている余裕はなく、顔を出したままでの平泳ぎになってしまう。後輩の男子生徒が追いついていたが、もう加速することはできなかった。

（お願いだから気づかないで……）

美波にできることは神頼みしかない。懸命に祈りながら泳ぎつづけた。

そのときプールサイドの桑原と視線がぶつかった。右手に握り締めた小さな四角い物を、美波にだけわかるように見せつけてニヤリと笑う。なにやらボタンを操作すると、赤いランプが点灯と消灯を繰り返した。

（まさか……あれでバイブを？）

バイブの妖しい振動は、その赤いランプに連動していた。信じられないことに、バイブはリモコンで遠隔操作できるようになっていたのだ。

「あつ、また……うむううっ」

膾がブルブルと震えている。モーターの振動音は下腹部全体に響き渡り、内腿の筋肉を微かに痙攣させていた。あまりの屈辱に涙が溢れてくるが、水に濡れているため誰にも気づかれなかった。

しかし、美波が顔をあげて平泳ぎしている光景は、部員たちの目には異様に映ったらしい。スピードも遅いので余計に目立っているのだろう。プールサイドにいた何人かが、首をかしげながら見つめているのがわかった。

新たな涙を溢れさせながら正面を見ると、汐理が心配そうな顔でスタート台の横に立っていた。

（ああ、汐理先生……）

少しずつ汐理に近づいていく。できることなら、このまま彼女の胸に飛びこんで泣きじゃくりたかった。だが、それをしたらすべてが終わってしまう。

「美波ちゃん、ここでストップよ」

汐理の口調はいつになく強い。反論を許さない雰囲気だ漂っていた。よほど美波の様子がおかしく見えたのかもしれない。

「桑原さん、いいですね。少し休憩させます」

普段はほとんど言いなりの汐理だが、今回ばかりはきっぱりと意見した。その迫力

に気圧されたのかどうか、桑原は珍しくなにも言わなかった。

「し、汐理先生……ハア……ハア……」

美波はスタート台の下に到着すると、ようやく泳ぎを中断した。

乱れた呼吸を整えながら、涙を誤魔化すために顔を水に浸けて何度も擦った。後ろを泳いでいた後輩はなにも気づかなかつたらしい。「ありがとうございます」と律儀に頭をさげて水からあがった。

「明らかにオーバーワークよ」

汐理がたしなめるような言葉をかけてくる。心配を通り越して、少し怒ったような目をしていた。

「休憩なしで泳ぐなんて無茶よ。最後の平泳ぎなんて、溺れそうだったじゃない。これ以上、無理をしないって約束して」

どうやら気合いが入りすぎていると勘違いしているらしい。部員たちも汐理同様に心配そうな目を向けていた。

「はい……すみません……」

美波は小声でつぶやいたが、プールからあがれなかった。

競泳水着には乳首が浮いているし、臍に埋めこまれたパイプはいまだに振動をつづ

けているのだ。とてもではないが、プールサイドに立つ勇氣はなかった。

水に浸かったままプールの隅でしばらく休み、再びゆっくりと泳ぎはじめる。何度か休憩を挟みつつ、目立たないようにプールの中央を往復した。

その後、桑原がちよっかいをかけてくることはなかった。

情けをかけたわけではない。時間をかけてじっくりいたぶるために、一時的に中断したのだ。その証拠にバイブは弱い振動をつづけており、桑原の唇には終始悪魔的な笑みが浮かんでいた。

卑猥な悪戯が発覚すれば、その時点で楽しみが終わる。だから、午前中は美波が苦しむ様を黙って眺めていることにしたのだろう。

昼休みになり、部員たちが昼食を摂るため合宿所に戻っていくと、美波も遅れてプールからあがった。競泳水着を脱ぐことも、バイブを抜くことも許されない。暑かったがジャージの上下を羽織って昼食を摂った。

午後も同じように、コース中央を占領してだらだらと泳ぎつづけた。みんなには悪いと思ったが、こうするより他になかった。

西の空が茜色に染まってくると、汐理が練習終了を皆に告げた。

部員たちがシャワーを浴びて更衣室に消えていくのを、美波はプールのなかから見

送った。

汐理が心配そうな顔で振り返ったので、美波は梯子を使ってプールからあがる素振りを見せた。

口うるさく言いたくないのだろう。汐理は小さく頷くと、美波を待つことなく更衣室へ向かった。

「思ったよりも根性があるようだな」

最後まで残っていた桑原が話しかけてきた。プールサイドにしゃがみこみ、片頬をいやらしく歪めながら顔を覗きこんでくる。

「くっ……絶対に負けないから」

美波は乳首の浮いた胸を隠そうと、登りかけた梯子をおりて、もう一度水のなかに身体を沈めた。

「やつと終わったと思ってるんだろう。でも、まだ補習が残ってるぞ」

桑原の顔には、普段は決して見せることのない下劣な笑みが浮かんでいる。執念深く陰湿な性格が滲み出ているようだった。

「こんなことして、なにが楽しいの？」

美波は悔しさを滲ませて、男の目をにらみつけた。

オリンピックでメダルを獲得するという大きな夢を叶えるため、おぞましい行為を受け入れている。しかし、この男に隷従することを誓ったわけではない。憎悪はどこまでも大きく膨らんでいく。

「おまえが苦しむ顔を見ていると胸がスカッとするんだ」

桑原はプールに入ってくると、美波に寄り添うようにして見おろしてくる。相変わらず目だけは笑っておらず、暗い情念の炎が揺らめいていた。

「お兄ちゃんの……兄のことがそんなに嫌いだったんですか？」

「嫌い？ それはちよつと違うな」

桑原は意外そうな顔を見ると、不服そうに「フンッ」と鼻を鳴らしてみせる。そんなこともわからないのか、とでも言いたげな表情が腹立たしい。だが、美波はなにも言い返さずに黙って聞いていた。

「好きとか嫌いとか、そんな簡単な問題じゃないんだ。おまえたち兄妹のように才能ある奴らには、人の気持ちが変わらないだろうがな」

ごく普通に話しているが、その目は据わっている。またなにかを企んでいるのかもしれない。他人の言葉を聞き入れない冷徹な目だった。

美波は後ずさりしたくなるのをこらえて、競泳水着の胸もとを隠すようにそつと抱

いた。なにを言ったところで、この男の心には届かない。無駄だということを悟ると、口を開く氣力が急激に萎えていった。

(一週間だけ……合宿の間だけ我慢すれば……)

胸のうちで繰り返し返す。それだけが心の支えだった。

だが実際には期限を設けられたことで、逆に無理をする結果となつてゐる。オリンピックしか見えていない美波には、男の姦計を見抜くことができなかつた。

「さてと、居残り練習をはじめるか」

真正面に立つた桑原が、両肩に手を乗せてくる。競泳水着の肩紐のあたりを、生温かい手のひらで撫でまわされた。

「な……なにをするつもり？」

「まずはフェラチオ特訓だ。チンポをしゃぶらせてやる。今どきの女子高生なら、やったことはなくても知つてるよな？」

肩をぐつと押されて、膝が崩れそうになる。慌てて踏ん張るが、身体に力が入らなかつた。

「ちよ、ちよつと……くうつ」

バイブの振動は停止しているが、奥深く埋めこまれているので膣壁を刺激する。加

えてオーバーワークが災いし、疲労が澱のように蓄積していた。

「水泳部らしく、プールのなかでフェラチオするんだ。おらっ！」

体重をかけられると、ついに膝が折れてしまう。顔が水没する寸前、スイマーの本  
能で反射的に大きく息を吸いこんだ。

「うぐうっ……」

頭まで完全に沈められて、胸の奥に恐怖が湧き起こる。

恐るおそる水中で目を開くと、鼻先数センチの距離に桑原の股間があった。競泳パ  
ンツが男根の形にくつきりと盛りあがっている。美波を嬲ることで興奮したのは間違  
いなかった。

桑原は左手で頭を押さえつけると、右手だけで競泳パンツをおろしていく。布地の  
下に隠されていた巨根が弾けるように剥きだしになり、途端に水流が顔面に押し寄せ  
てきた。

（ううっ、いや……本気なの？）

巨大な亀頭が鼻先に触れて、思わず水中で首を左右に振りたくる。しかし、桑原は  
頭を押さえこんだ手から力を抜こうとしなかった。

「しゃぶるんだ。射精させるまで許さないぞ」

信じられない言葉を浴びせかけられる。いくら水泳で鍛えているとはいえ、長時間連続で潜っていらられるわけではない。しかし、この男は一度言いだしたら引きさがない性格だった。

躊躇している時間はない。このままでは窒息してしまう。美波は水中で剛根の根元に両手を添えると、大きく膨らんだ先端部分に唇を押し当てた。

(気持ち悪いけど、やるしかないの……)

閉じていた唇を少しずつ開きながら、ツルリとした表面を滑らせていく。鉄のように硬いのに、唇が触れている部分だけはゴムのように微かな弾力があるのが不気味だった。水中でありながら、ペニスは決して冷えることなく熱を持っていた。

おぞましいが途中でやめるわけにはいかない。水が口内に流れこむのを防ぐためには、唇を亀頭にしっかりと密着させるしかなかった。

(こんなに大きいなんて……くうっ、息が……)

なんとか巨大な肉の実を口に含むが、すでに呼吸が苦しくなっていた。とてもではないが射精に導く余裕などない。そもそも初めてのフェラチオで、この後どうしたらいいのかわからなかった。

(もうダメ、苦しい……)

男根を咥えたまま首を小さく左右に振る。すると、桑原が水中で肩を掴み、力強く引きあげられた。

「ぶはあつ……ハア……ハア……」

美波は夢中になつて空気を貪つた。窒息の恐怖が胸底に芽生えていた。

涙を流して喘ぐ美波のことを、桑原は薄笑いを浮かべながら眺めている。苦しんでいる姿を見て、心の底から楽しんでゐるのだ。

「俺が男の悦ばせ方を仕込んでやる。もう一度いくぞ」

「ま、待つて——うぶううつ」

抵抗しようと踏ん張つたが無駄だった。男の腕力に敵うはずがない。力まかせに有無を言わず沈められてしまう。そして勃起を口もとに押しつけられて、強引に咥えこまされた。

「頭を動かすんだ。こうやって」

桑原が両手で頭を掴み、ゆつくりと前後に動かしてくる。密着させた唇が肉胴部分を擦り、巨大なペニスが出たり入ったりを繰り返す。排尿する器官を咥えていると思うと、猛烈な吐き気がこみあげてくる。

気色悪くて吐きだしたくなるが、水を飲むのが恐ろしくて唇を締めつづけた。

「うぐっ……ううっ……むううっ」

口を道具のように使われるのは、屈辱以外の何物でもない。瞳を強く閉じて、早く射精してくれることだけを祈っていた。

すると、プールの外がにわかに騒がしくなった。

着替えを終えた部員たちが、更衣室から出てきたのだ。みんなで合宿所に戻るところなのだろう、雑談を交わしながら歩いていく様子が伝わってきた。

(やだ、みんなが近くににいるのに……)

より屈辱感が大きくなる。会話の内容までは聞こえないが、仲間たちの楽しそうな雰囲気を感じて惨めな気持ちに拍車がかかった。

「おまえたち、早く合宿所に戻って身体を休めろよ」

桑原は偉そうに声をかけながら、水中では美波の頭を前後に動かしていた。

部員たちは桑原がひと泳ぎしてから戻ら思っているらしい。疑う様子もなく、誰もが素直に「はい」と返事をしていた。

(ああ、いや……苦しい……もう……)

仲間の気配を感じながらのフェラチオはあまりにもつらく、心が引き裂かれるようだった。

水を飲まないように唇を締めつける。すると、ますます頭を強く前後に揺すられて、亀頭の先端が喉の奥まで潜りこんできた。

(そんな、気持ち悪い……ううっ、死んじゃう)

吐き気がこみあげてくるがどうにもならない。強く閉じた目尻から涙が溢れて、プールの水に溶けていく。呼吸が苦しくなり、脇の裏でチカチカと小さな光が瞬きはじめていた。

部員たちの気配が遠ざかると、ようやく口から男根が引き抜かれる。そのまま強引に持ちあげられて、水面に頭が浮上した。

「うはっ……」

激しくむせ返りながら、肺に空気を送りこむ。何年も水泳の厳しい練習を積んできたが、これほど酸素が恋しいと思ったことはなかった。

美波ほどの肺活量があってもここまで追い詰められるのだ。他の部員だったら確実に気を失っていただろう。

「も……もう……許して……」

掠れた声でつぶやいた。もう悔しいなどという感情はなくなっている。フェラチオに対する汚辱感も消えていた。今あるのは空気を吸えない恐怖だけだ。

「最初に言ったはずだぞ。射精させるまで終わらないと」

桑原は冷徹に言い放つと、またしても美波の頭を水没させる。体力がどんどん奪われて、ほとんど抵抗することができなかった。

口内に男根をねじこまれる。条件反射的に唇で肉胴を締めつけると、早く終わらせたい一心で自ら首を振りはじめた。

「むうっ……うぶっ……ぐふうっ」

「おおっ、いいぞ。チンポのしゃぶり方が上手くなってきたな。水泳選手よりも風俗嬢のほうが向いてるんじゃないのか」

桑原が下卑た呻き声を漏らしながら、からかいの言葉を浴びせかけてくる。快感を覚えているのか、口内の男根はパンパンに膨らんでいた。先端からとろみのある汁が溢れているのが気持ち悪かった。

「舌も使えよ。そうすれば少しは早く射精するかもしれないぞ」

嫌だと思ったのは一瞬だけだ。一刻も早く終わらせようと、舌を使って刺激をはじめめる。とにかく、この悪夢に幕をおろしたかった。

（なんでもいいから、早く終わって……）

舌先で男根の裏側の筋をツーツツと舐めあげる。すると男の腰にぶるると小さな

震えが走った。

「くうっ……その調子だ。首を振るのも忘れるなよ」

桑原が低い声で唸った直後、遠くから女性の声が聞こえてきた。

「桑原さん、美波ちゃんの姿が見当たらないんですけど、ご存じありませんか」

汐理だった。どうやらプールの金網越しに、桑原に話しかけているらしい。先ほどの部員たちの声より、ずっとはっきり聞こえていた。

（そんな、汐理先生……お願いだから気づかないで……）

美波は男根を咥えた状態で固まってしまった。すぐそこに汐理がいると思うと、はしたない行為を継続することができなかつた。

しかし、桑原が水中で頭を掴み、前後にゆっくりと揺らしてきた。フェラチオをつづけるという合図だ。

（ひどい、あんまりよ……先生に見つかっちゃう）

心のなかで泣き言をつぶやきながら、口唇奉仕を再開した。

肉竿を唇で扱きつつ、裏筋を舌尖で舐めあげる。すでに息が苦しいが、どちらにせよ汐理がいる間は浮上できないのだ。

「美波ですか。見てませんか。もう合宿所に戻ったんじゃないやありませんか？」

「でも、更衣室に来てないんです」

汐理の心配している様子が伝わってくる。だからこそ、裏切っているような気持ちになってしまふ。まさか、すぐ近くでこんな破廉恥な行為に耽っているとは思えないだろう。

「じゃあ、散歩にでも行ったんですかね。気分転換でもしてるんでしょう」

桑原は平静を装っているが、口内のペニスにはヒクついている。射精感がこみあげているのかもしれない。先端からは生臭い汁がとめどなく溢れていた。

（ああ、臭い、もういや……汐理先生、早く行って……）

空気を吸うことだけを考えながら、男根をねぶりあげる。このまま溺れてしまうのではないかという恐怖が脳裏を掠めた。

「もし見かけたら、急いで合宿所に戻るように言っていただけますか。わたしはもう少し捜してから合宿所に戻ります」

ようやく汐理がプールから遠ざかっていく。ほっとして男根を吐きだそうとしたとき、後頭部ががっしりと抱えこまれた。

「むうっ！」

やっつと空気が吸えると思っていたのでショックは大きい。両手で男の腰を押し返そ

うとするが、さらに喉の奥まで押しこまれてしまう。

「助かると思ったら大間違いだぞ」

意地の悪い囁きが聞こえて、男根を激しく抜き差しされる。巨大な亀頭で喉奥を突かれると、胃がひっくり返りそうな嘔吐感がこみあげた。

「ほらほらっ、喉で締めつけてみる！」

猛烈なピストンで責められて、頭のなかが真っ白になっていく。

（く、苦し……死んじゃうっ！）

心のなかで絶叫した直後、口内の男根が異常なほど膨れあがった。

「くおっ、出してやるっ、全部飲むんだぞ……ぬうううッ！」

桑原が獣じみた呻き声を漏らして、腰をビクビクと震わせた。亀頭の先端から熱い粘液が噴きだし、喉の奥を容赦なく直撃した。

「おごッ……うごほおッ」

生臭さと苦味がひろがり、猛烈な嘔吐感がこみあげる。しかし、空気を吸いたい一心で、射精される端から次々と嚙下した。

驚くほど大量の牡汁を注ぎこまれて、ようやく男根の発作が収まった。

食道から胃にかけてが灼け爛れたようになっていた。息ができないばかりか、精液



まで飲まされたのだ。酸欠状態で意識が遠のきかけている。頭のなかが真っ白で、なにも考えられなかった。

もう自力で浮上することもできず、桑原によって引きあげられた。顔が水面に出ると、一気に空気を吸いこんで激しく咳きこんだ。

「ゲホッゲホッ……く、苦し……」

「ずいぶん苦しそうだな。オリンピックを目指すんだったら、これくらいのトレーニングは楽にこなさないとダメだぞ。クククッ」

残忍な笑い声が、夕日でオレンジ色に染まったプールに響き渡る。特別コーチの本性は、女の苦しむ姿が好物のサディストだった。

「ハア……ハア……も……許し……」

まともな言葉を発することもできない。桑原に支えられていなければ、水のなかに沈んでしまいそうだった。しかし、弱気な姿を見せたことで、牡の嗜虐欲をますます煽りたててしまったらしい。特別コーチの目が爬虫類のようにギラリと光った。

「まだ特訓は終わってないぞ」

桑原は舌なめずりをすると、脱力した美波の身体を後ろ向きにしてプールの縁にもたれさせる。上半身をプールサイドに伏せて、ヒップを突き出すような格好だ。

「な……なにを……」

グロッキー状態の美波は、水中で競泳水着の股布をずらされても抗うことができなかった。朝から挿入したままだったバイブをズルリと引き抜かれて、わずかに痛痒い刺激が走り抜けた。

「あううっ……」

すでに膣感覚が麻痺しており、微かな呻き声が溢れだす。その直後、膣口になにか硬い物が押し当てられた。振り返る気力はないが、それが男根だということは伝わってくる熱気でわかった。

「やめ……て……」

意識は相変わらず朦朧としたままだ。身の危険は感じていても逃げることはできなかった。

「一日中バイブを挿れてたんだ。少しは慣れてきたんじゃないのか？」

「あつ……だ……ダメ……ンンンっ」

背後から強引にペニスが押しこまれてくる。下半身は水中に浸かったまま、またしてもレイプされてしまったのだ。

無機質なバイブと異なり、火傷しそうな熱気が突き抜ける。本物の男根で膣道を擦

られて、反射的に背筋が反り返った。

（ああ……わたし、また犯されちゃってる……）

意識はぼんやりしているが、自分の置かれている状況は理解できる。霞がかかったような脳裏に、男根をねじこまれる屈辱がひろがっていた。

「水中立ちバツクだ。そうそう経験できないぞ」

桑原がさも楽しそうにつぶやきながら、腰を力強く振りはじめた。極太の肉柱を激しくピストンさせて、昨夜処女を失ったばかりの膣道を責めたててくるのだ。

「うっ……くうっ……痛っ……うむむっ」

ロストヴァージンのときほどではないが、敏感な膣壁を擦られると痛みが走る。尻肉がヒクヒクと痙攣して、女壺まで勝手に蠢いてしまう。その結果、男を悦ばせることになり、より激しい抽送を誘発した。

「痛がつてるわりに、オマ○コのなかはうねってるぞ。ほら、こうやって奥を突くと絡みついてくる。責め甲斐のある身体をしてるじゃないか」

「あうっ……激し……やめ……くううっ」

為す術もなく立ちバツクで犯されて、屈辱の涙を溢れさせる。長大なペニスを深々と埋めこまれ、絶望感が胸のうちを埋めつくす。とにかく、早く終わってくれること

だけを願っていた。

「美波の一番奥に、たっぷり出してやるからな」

桑原の息遣いが荒くなっている。好き放題に腰を振り、自分ひとりで興奮して昂っていく。射精の瞬間が迫っているのか、男根が膨らみはじめていた。

「や……なかは……あっ……ああっ」

「気絶しかけてるクセに中出しは嫌がるのか。笑わせてくれるじゃないか」

尻肉をがっしりと掴まれて、高速でペニスをピストンされる。中出しを嫌がったのがいけなかった。わざと人が嫌がることをする性格だ。興奮しきった鼻息と、悪魔じみた笑い声が聞こえていた。

「もうすぐ出さぞつ、孕んだらオリンピックどころじゃなくなるな」

「ひっ、やだ……ひいっ」

「おおっ、来たぞっ……来た来たっ、うおおおおおッ！」

桑原が呻くのと同時に、男根が激しく脈打った。先ほど放出したばかりだというのに、凄まじい勢いで粘液が吐きだされる。灼けるような感覚が突き抜けて、美波はたまらず背筋を反り返らせた。

「ひいッ、ダメっ、なかで出てる、熱いっ、ひいッ、あひいひいひいッ！」

あまりのおぞましさに怪鳥のような悲鳴が迸る。腔襖の隅々まで熱いザーメンが浸透するのがわかり、涙と涎を垂れ流しながら下半身を痙攣させた。

男根が引き抜かれると、一拍置いて粘液がどろりと溢れだす。プールの水に白いザーメンが漂い、時間をかけてもやもやと拡散していった。

(もう……やだ……)

声押し殺して啜り泣く。しかし、半ば気を失いながらも、プールサイドに投げだされた両手は強く拳を握り締めていた。

「フッ……気の強さは兄貴譲りだな」

桑原が呆れたように、しかし楽しそうに鼻で笑った。

「おまえを黽ることが本気で面白くなってきたよ。後でフェラの特訓をしてやる」

美波はプールサイドの地面に頬を押し当てて、卑劣な男の声を聞いていた。

(負けたくない……こんな奴に……)

力をわけてもらおうと、脳裏に兄の顔を思い浮かべる。だが、思考がぐにやりと歪み、意識は闇に吸いこまれていった。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!